

## ぼんでんの歴史と由来

ぼんでんは横手で 300 年以上前から作られ、展示されてきた神道に根ざした祭具である。ぼんでんは、神の霊が地上に降りてきたときに、その霊を宿すためのものである。長さ約 4 メートルの木製の竿に、紙製ののぼりなどの装飾を施したものが一般的である。

### 神道儀礼具としてのぼんでん

ぼんでんの起源は、史料によると、神道の儀式に使われる「幣束（へいそく）」と呼ばれる宗教的な道具である。幣束は「ボデ」とも呼ばれ、神道に根ざした修験道の修行者たちは、「ボデ」と守護神である「大梵天」の名を組み合わせて「ぼんでん」と呼んでいた。

現在のぼんでんは、起源となった幣束よりもはるかに精巧な装飾が施されている。旭岡山神社に奉納されるようになったのは、1845 年に横手城主の 8 代目戸村十太夫（1818～1880）が正月 16 日に行った大獵が始まりとされている。十太夫の一行には消防団員が多く含まれており、城に戻る際に旭岡山神社に立ち寄って火災の安全を祈願した。消防団員は、火元に消防団員を呼び寄せるための「纏（まとい）」と呼ばれる標具を使用していた。纏とは、長い棒にのぼりが付いたもので、大きな幣束によく似ている。祈祷の際、消防士たちは門の前で纏を掲げた。横手の雪祭りで使用される巨大なぼんでんは、150 年以上前に行われた狩猟の際に使用された消防士の基準をそのまま反映しているとの言い伝えがあり、毎年、大獵の日に梵天コンクールが開催される。

### 雪祭りのぼんでん

雪祭りの梵天コンクールで展示されるぼんでんには様々なデザインがあり、それぞれの地域や企業を代表して作られている。塔や祭壇、その年の干支など、伝統的なデザインを踏襲するグループもあれば、スポーツ競技など現代的なデザインをモチーフにするグループもある。どのようなモチーフであっても、自分のぼんでんを飾る際には、その形や大きさ、構成などが厳密に規定されている。

まず、竿の長さが 4 メートルあること。竿の上には直径 90cm の竹かごがあり、そこにさがりと呼ばれる短冊状の 270cm の布が吊るされている。次に「幣束（へいそく）」に使われる「紙幣（しで）」、そして籠に巻きつける「鉢巻」がある。最後に、ぼんでんの上部を飾る「頭飾り」と呼ばれる精巧な装飾品は、底辺が 120cm 以下、高さが 150cm 以下でなければならない。19 世紀末には、竹や針金、布などで作られたものが多かったが、現在では発泡スチロールなどの軽量の素材を使ったものもあり、より精巧なデザインが可能になっている。